修論要旨

インドネシア語形容詞派生動詞の分析

長南　一豪

第1章　自動詞・他動詞と動詞分類

動詞は自動詞と他動詞に分けられる。自動詞は目的語をとらない動詞、他動詞は目的語をとる動詞である。英語では、基本的に主語は動詞の前、目的語は動詞の後ろになり、また代名詞の場合には格変化が起こるので、主語・目的語が統語的に明らかである。しかし、日本語の場合、かき混ぜにより主語・目的語の位置が自由に入れかわる。また、格がさまざまな助詞の形であらわれる。そのため、ある動詞が他動詞であるかどうかの判断が難しいことがある。しかし、基本的には主語・目的語を判別する方法はあり、主語・目的語概念とそれに基づく自動詞・他動詞の分類は、普遍性を持っていると考えられる。

自動詞・他動詞分類にはいくつかの問題点がある。

① 目的語の随意性

他動詞の目的語は、英語でも日本語でも省略されることがある。興味深いことに、動詞によって省略できるものと省略できないものがある。また、自動詞は目的語をとらないが、英語の結果構文や同族目的語構文では、目的語があらわれることがある。このような事実は、動詞を自動詞と他動詞に厳格に二分するのではなく、自動詞から他動詞へと連続的にとらえる必要があることを示している。

② 項と意味役割

文中の名詞句は必須要素である項と、付加詞とに分けられる。項は、動作主・対象といった意味役割をもつ。ところが、自動詞文では、主語が動作主になるものと対象になるものとがある。他動詞では、主語は動作主、目的語は対象である。すると、それぞれの動詞が動作主・対象のいずれを項としてとり、それらの項が主語・目的語のいずれとしてあらわれるか、に一貫性がない。自動詞・他動詞分類と、項の意味役割との間の不一致が問題となる。

③ 使役交替

英語では使役交替と呼ばれる現象がある。例えば動詞breakは、自動詞「こわれる」と他動詞「こわす」の2つの意味をもつ。ところが、自動詞では対象が主語になるのに対し、他動詞では動作主が主語、対象が目的語になっている。一方、動詞drinkでは、他動詞でも自動詞でも主語は動作主である。このような矛盾はなぜ生じるのか。

第2章　非対格動詞・非能格動詞

第1章で述べた問題点を解決するために、自動詞をさらに2つに分類する。breakのように対象を主語としてとる動詞を非対格動詞、workのように動作主を主語としてとる動詞を非能格動詞と呼ぶ。さらに、非能格動詞の主語はもとから主語であるが、非対格動詞の主語は目的語として規定される、という非対格

性仮説が提唱された。3種類の動詞は、以下のように図式化される。

a. 非対格動詞 < <y>>

b. 非能格動詞 <x < >>

c. 他動詞 <x <y>>

そして、使役交替の現象は、非対格動詞が内項yをもち、yが主語の位置へと移動することにより説明される。

非対格動詞・非能格動詞分類の一例は、以下のようになる。

非対格動詞

① 形容詞、ないしそれに相当する自動詞

② 対象物を主語にとる動詞
burn, fall, sink, melt, open, break

③ 存在ないし出現をあらわす動詞
appear, happen, occur, disappaer, remain

④ 五感に作用する非意図的な現象
shine, sparkle, smell, jingle

⑤ アスペクト動詞
begin, start, stop, continue, end

非能格動詞

① 意図的ないし意志的な行為
work, play, smile, swim, walk, cry

② 生理的現象
cough, sneeze, vomit, sleep

英語・日本語で、非対格性の証拠となる現象、すなわち非対格動詞の主語が他動詞の目的語と同じようなふるまいを示す非対格性症候群が見られる。

① there構文

英語のthere構文は、存在・出現をあらわす非対格動詞のみあらわれ、非能格動詞や他動詞はあらわれない。これは、非対格動詞が外項をもたないため、外項の位置にthereが挿入されると考えると説明がつく。

② 結果構文

日本語・英語の結果構文では、結果述語は他動詞の目的語と非対格動詞の主語を叙述するが、他動詞の主語と非能格動詞の主語は叙述できない。これは、非対格性仮説による内項の制限として説明される。

他に、英語の擬似受身文、日本語の迷惑受身文、英語・日本語の完了形容詞、英語のway構文、同族目的語構文、日本語の数量詞遊離等、さまざまな構文が、非対格性を示す証拠として提案されている。

非対格性仮説に対しては、機能主義の立場からの批判がある。確かに、統語的な非対格性だけでは説明のつかない現象もある。しかし、これらの構文を、すべて非対格性とは無関係とすることは不可能であり、非対格性という概念は重要な意味をもっている。

第3章　意味による動詞の分類

自動詞の非対格動詞・非能格動詞という分類をふまえて、他動詞も含めてさらに動詞分類を再考する。

Vendlerは、英語の動詞を、状態・到達・活動・達成に4分類することを提案した。到達・活動・達成の3つは、動詞のアスペクトによる分類である。また、金田一は、独自に日本語動詞の4分類を提案した。この2つの分類は、たいへん類似しており、動詞の意味に基づく分類として、意味があるものと思われる。

以上の4分類に基づき、語彙概念構造という考え方を導入して、動詞の意味のちがいを表示する。例えば、Vendlerの4分類は、以下のようにあらわされる。

A. 状態動詞：[y BE AT-z]

B. 活動動詞：[x ACT] / [x ACT ON y]

C. 到達動詞：[y BECOME [y BE AT-z]]

D. 達成動詞：[[x ACT] CAUSE
[y BECOME [y BE AT-z]]]

ここで、従来の非能格動詞はB、使役交替をする非対格動詞はCに取り込まれる。このように、動詞の意味を「分解」することにより、使役交替や結果構文のような、動詞の意味による統語的なちがいを説明することが可能になる。

第4章　インドネシア語の動詞分類

インドネシア語の動詞は、接頭辞によって、ゼロ-, ber-, me-の3つに分けられる。ゼロ-とber-はおもに自動詞、me-はおもに他動詞を派生する。従来の研究は、ber-の機能の細かな分類等は行われているが、本質的な分析はなされていない。

非対格動詞・非能格動詞の分類を考える。英語の非対格動詞・非能格動詞に相当するインドネシア語の動詞を挙げると、非対格はゼロ-、非能格はber-に対応する傾向にある。すなわち、接頭辞ber-の機能の一つは、非能格の明示と考えられる。

インドネシア語における非対格性を示す証拠として、次のようなものが考えられる。

① ada構文

存在を示すadaという動詞は、他の動詞とは異なり、動詞が文頭にくることができる。これは、英語のthere構文と並行的な現象であり、adaが非対格動詞であると考えると説明がつく。また、出現・消滅をあらわすmuncul, hilangも同様の構文が可能である。一方、非能格動詞や他動詞では、動詞が文頭にくることはない。さらに、adaに接頭辞ber-をつけたberadaは、adaとほぼ同じ意味をあらわすにもかかわらず、動詞が文頭にこない。これは、ber-が非能格を表示するためと考えられる。

② 結果構文

インドネシア語でも結果構文に相当するものがあり、日本語・英語と同じく、結果述語は他動詞の目的語と非対格動詞の主語を叙述する。

他に、迷惑受身文に相当するke-anや、完了形容詞に相当する表現があり、いずれも、インドネシア語における非対格性を示している。

第5章　インドネシア語形容詞派生動詞の分析

インドネシア語では、形容詞基語に接頭辞me-をつけることで自動詞、me-kanをつけることで他動詞を生産的に派生する。me-kan他動詞をもちながらme-自動詞をもたないものや、基語となる形容詞の性質によって例外的に思える現象が多数ある。しかしながら、語彙概念構造を導入することにより、インドネシア語形容詞派生動詞の理論的な解釈が可能になる。

形容詞派生動詞は、概略、次のような語彙概念構造を持っていると考えられる。

(1)a. Sungai itu　mendalam.「その川が深くなる」
　　The river　deepens.
　b. [y BECOME [y BE AT-deep]]

(2)a. Mereka mendalamkan sungai itu.
　「彼らはその川を深くする」
　They　deepen　the river.
　b.[[x ACT]CAUSE[y BECOME [y BE AT-deep]]]

自動詞mendalam「深くなる」は(1)b、他動詞mendalamkan「深める」は(2)bの語彙概念構造が想定される。ここで、自動詞と他動詞のどちらが基本であるかという問題が生じる。一見して、形態的に、自動詞mendalamが先であることは明らかであるように思える。しかし、直感に反し、形容詞dalamからの派生動詞は他動詞mendalamkanが基本であり、自動詞mendalamは他動詞mendalamkanから派生する。

大きな証拠は、自動詞・他動詞の分布である。インドネシア語形容詞派生動詞は、membersihkan「きれいにする」のように、me-kan他動詞形をもちながら、me-自動詞形をもたないものが多数ある。

このことは、他動詞が基本であることを示している。英語・日本語の形容詞派生動詞も、同様に他動詞が基本であると考えられる。

では、他動詞からどのようにして自動詞が派生するのだろうか。それは、影山の提案する反使役化によって説明できる。影山によれば、以下のように、自動詞b.は他動詞a.の使役主(x)が(y)と同定され、束縛されることによって派生するとしている。

a. [[x ACT]CAUSE[y BECOME [y BE AT-z]]]

b. → [[x＝y ACT]CAUSE[y BECOME [y BE AT-z]]]

この分析は、インドネシア語形容詞派生動詞に適用できる。さらに、反使役化の条件として、変化対象(y)が本来的に変化を起こす性質(内在的コントロール)を持つことが必要である。この考え方により、membersihkan「きれいにする」がなぜme-自動詞形を持たないかを説明でき、自他の分布に関する解釈が可能になる。senang「楽しい」のような心理形容詞では、変化対象は内在的コントロールを持たず、必ず原因(使役主)が必要なので、me-自動詞形を持たない。

また、pintar「頭がいい」のような生来の性質を示す形容詞は、性質の変化を想定できないため、自動詞・他動詞ともに派生しない。

一方、一部の形容詞はme-iによって他動詞化するが、これはme-kanのような使役とは本質的に異なる。松岡に基づき、me-iは「対象物に〜を与える」という付与動詞であると考える。付与動詞という解釈により、me-iの生産性の低さや、me-kanとme-iの分布のちがい等を説明できる。me-kanとme-iの語彙概念構造は、以下のように想定される。

a. 使役動詞memanaskan「暖める」の語彙概念構造

[[x ACT]CAUSE[y BECOME [y BE AT-hot]]]

b. 付与動詞memanasi「暖める」の語彙概念構造

[[x ACT]CAUSE[y BECOME [y HAVE hot]]]

この語彙概念構造のちがいから、ほとんど同じ意味に見えるmemanaskanとmemanasiの用法のちがいが説明できる。また、me-kan使役動詞は全体的解釈、me-i付与動詞は部分的解釈というちがいが生じることがある。英語の壁塗り交替構文で見られる解釈の違いと類似している。これは、me-i付与動詞において、対象は本来前置詞の位置にあったものと考えることで説明できる。さらに、menerangkan「説明する」とmenerangi「照らす」のような語彙特殊性と見られた現象の説明が可能になる。

me-iを付与動詞と解釈すると、基語形容詞は名詞であるとも考えられる。マイアーズの一般化に抵触するが、me-i付与動詞では、形容詞基語は名詞化していると考える方が合理的である。

第6章　インドネシア語心理形容詞派生動詞の分析

インドネシア語の心理形容詞派生動詞は、英語の心理動詞と同じく、非常に複雑なふるまいを示している。

senang「楽しい」から派生するme-kan動詞menyenangkan「楽しませる」は、他の形容詞基語と同じく、使役動詞として解釈できる。しかし、心理形容詞me-kan形は、目的語をとらないなど、動詞ではなく形容詞化することが知られている。

senangのme-i形menyenangi「〜を好む」は、me-i付与動詞とはまったく異なり、前置詞代用動詞と考えられる。menyenangkanとmenyenangiとでは、一見して、主語と目的語の意味役割が逆転している。これは、主題役割付与画一性仮説(UTAH)にとって、大きな問題となる。

インドネシア語心理形容詞派生動詞は、主語と目的語の意味役割に基づき、少なくともsenangタイプ、takutタイプ、khawatirタイプに分けられる。ここでは、意味役割を精密化することによる解決を示す。

senangタイプの意味役割は、以下のように考えることができる。

a. menyenangkan[AG/C　TH]
（AG：動作主　C：原因　TH：対象）

b. menyenangi　[EX　TH]
（EX：経験者　TH：対象）

me-kanはふつうの形容詞と同じく使役動詞であり、me-iは前置詞代用動詞と解釈できる。

takutタイプでは、主語と目的語の意味役割がsenangと完全に逆転しているように見える。me-kanは使役動詞ではなく対象をあらわす前置詞akanの縮約形である。一方、me-iは他の形容詞と同じ付与動詞と解釈できる。

khawatirタイプは、me-i形がなく、me-kan形が2つの意味をあわせもつ。一つはsenangと同じ使役動詞であり、もう一つはtakutと同じakanの縮約形である。